

圓福寺報

圓福寺報 第六十五号
 平成二十六年四月十五日発行
 発行者 臨濟宗妙心寺派 圓福寺
 千葉市稲毛区穴川町三七五 TEL (二五二) 九一八一
<http://www.chiba-empukuji.com>
 E-mail: oshou@chiba-empukuji.com



「關
 從這裡入」
 (関かん 這この裡うちより入いる)

建長 寒松 □

建長寺派第四代管長
 寒松室宮田東珉老師ご染筆

目次

「和顔施わげんせ」
 一一一 笑顔から始めよう」 2 頁

東日本大震災復興祈念の梵鐘 6 頁

住職就任二十周年記念 仏跡巡拝
 「微笑みの国」ミャンマーを訪ねて 幕張 雨海 宏明さん 8 頁
 穴川 久保 糸い子さん

続・寺から半里
 ～わが町かど探索～ 園生町 熊倉 浩さん 18 頁

穴川花園幼稚園 園だよりから
 「子ども百態」 22 頁

平成二十六年上四半期
 お寺と和尚の日録抄 23 頁

境内墓地のご案内 23 頁

寺の事件簿
 「豪雪に見舞われる」 24 頁

わ 和

げん 顔

せ 施

笑顔から始めよう

圓福寺花園会の一年は、新年会から活動がはじまり、土曜会・写経会・四国あるき遍路・ご詠歌など、寺報に掲載した通り盛りだくさんです。その上、今年是不肖住職就任二十周年と銘打った、ミャンマーへの仏跡巡拝の旅もあります。

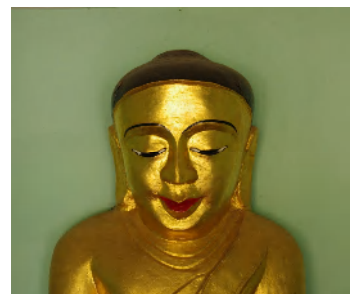
■ 仏像のお顔

ミャンマーに行く口実を、「ビルマへの想い」というタイトルで、旅行案内のお手紙をお送りいたしました。そこに書きましたように、「ビルマの豎琴」の舞台に行くわけですから、何十年ぶりかでその本を読

み返してみました。それも、うちの兄に「蔵書を整理したけれど、お前の所でも引き受けてくれないか。」と言われて引き受けた段ボール箱の中に、私が子どもの時に読んだ、ジュニア版「ビルマの豎琴」が入っていました。それを読んだのですから、本当に読み返したことになります。それでまた、水島上等兵の思いや行動に感動を新たにしました。



「ビルマの豎琴」の本だけでなく、ミャンマーの特集を組んだ旅行雑誌や、仏教遺跡「パガン」の専門書など、いろいろと情報収集やら予習やらをしました。先日は、テレビでミャンマーを取り上げた番組が放送されており、これまた、よーく見ました。その番組を見ていたら、ミャンマーは仏教国ですから、もちろんたくさんの仏像があつて、日本の仏像と違って金ピカなのが多いのですが、その中の一つのお顔がとても興味をひきました。その仏像を遠くから見ると、きびしい顔でにらみつけるような表情をしています。足元からお顔を仰ぎ見ると、にっこり笑った表情に見えるという不思議な仏さんです。遠くから見てにらみつけるような表情は、外敵の





こころを、そのお顔に表していらっしやいます。

侵入を防ぐ意味で、足元にすが
る者に対しては柔和な笑顔で
守って下さるといふ意味がある
のだそうです。今回、ミヤン
マーに行ったら、ぜひその仏さ
んにお会いしたいものだと思っ
ています。

それに対して、日本の仏像、
如来とか菩薩とかのお顔はどれ
も柔和なお顔をされています。
目は半眼で、顔の表情も怒るで
もなく、笑うでもなく、その上
性別さえも不詳です。私たち
は、喜怒哀楽をすぐ顔に表して
しまいますが、そんな喜怒哀楽
を超越して、善悪とか、男女と
か、プラスかマイナスかとか、
効率がいいか悪いかとか、そん
なものすべてを超えた、そんな
ものに振り回されない穏やかな

■笑顔修行

私なんか、とつてもそんなお
顔はできないでおりますが、幼
稚園の園長になりたての頃、私
と同じぐらいの年齢の先生、と
いっても、私は三十過ぎて幼稚
園とかかわりをもったので、同
年齢でも大先輩の先生になるの
ですが、「園長先生、もっと笑
顔でいてください。」と何回も
注意されました。小さい子ども
たちがたくさんいる幼稚園です
し、お母さんたちの目もありま
すから、いつでもしかめっ面を
していては、幼稚園のイメージ
ダウンになると心配して忠告し
てくれたのだと思います。とこ
ろが、道場にいた時は、「新到
三年、白歯を見せず。」(入門し
たての雲水は、修行専一で、顔
をゆるめることなどあって、顔
はいけない。)だと言われて、歯
を見せて笑うことはいけないこ
とだと諭されてきました。それ



が、道場を出
てお寺に入
り、幼稚園と
かわるよう
になったら、
今度は笑顔を
作りなさいといふのです。道場
では笑うなと言われていた上
に、右も左もわからない幼稚園
に出入りするようになって、わ
からないし緊張はするしで、と
ても笑顔なんか作れるわけがあ
りません。

わからないことだらけでした
が、それでも菲才ながらなんと
かしようと思つて、毎晩夜十時
十一時ぐらいまで幼稚園で仕事
をしていたら、急性の緑内障に
かかり、その後、過労がたたっ
たらしくて顔面麻痺になってし
まい、余計、笑顔なんていう顔
を作れない、逆に神経が麻痺し
ているから無表情になったりし
てしまいました。
その顔面麻痺は、多少後遺症
があるものなのか治って、

しばらくしたら今度は右顔面が麻痺を起して、これで左右対称の顔になるかと思ったら、二度目の時には治療法が確立されていて、まったく後遺症もなく、左右対称の顔には戻らなくなっています。しまいました。

そうこうしているうちに、次第に幼稚園にも、小さい子どもたちにも慣れ、多少しかめっ面ではなくなったかなと思っておりますが、いかがでしょうか。

■奇跡を望むなら・・・

最近テレビで、外国人が日本の歌を歌って、だれが一番うまいかを決める番組が放送されています。参加する外国人は、驚くほどきれいな日本語で、一つ一つの歌詞を丁寧に歌います。日本の若い歌手が英語っぽく歌うのに比べて、本当に日本語を大切にしているなあと感じるの、よく見ます。その中から、日本でデビューする人も出てきて、アメリカのクリス・ハート



という黒人の人が、いろんな人の歌を歌っているCDを買いました。音楽のCDを買うのなんか久しぶりでしたが、それぐらい日本の歌詞をきれいに歌ってくれるので、思わず買ってしまいました。

そのCDを、市原への往復の軽トラックの中で聞くのですが、本当に歌詞がよくわかって、おもわず歌詞の言葉に聞き入ってしまいます。その中で、本当にいい歌詞だなあと思ったものをご紹介させていただきま。元は、ジュジュという日本人が歌った、「奇跡を望むなら・・・。」という歌の歌詞の一部です。

時々この世界で

ひとり取り残されたような

抱えきれないほどの

悲しみに胸が包まれる夜も

奇跡を望むなら

泣いてばかりいないで

幸せには

ふさわしい

笑顔があるはず

作詞は「E-3」という人で、どんな人かヤフーで調べても出てこないのです。どのような場面の歌なのかはわかりませんが、婚約者が、余命いくばくもない病気に侵されてしまいます。一人取り残されたような悲しみを感じて、眠れない夜もあったのだと思います。でも、悲しみに泣いてばかりいてはいけないと気づきます。そして、死の病が千に一つ方に一つ治るといふ奇跡を望む、そして、病気が治っ



た彼女と話をしたり笑ったりできるといふ幸せを望むのなら、そ

の幸せにふさわしいのは笑顔じゃないかと、彼は笑顔で見送ったのだらうと、私は想像しました。そして、歌詞の「幸せには ふさわしい 笑顔があるはず」というところに、いいこと言わないあと、軽トラックに揺られながら思いました。

■無財の布施 むさい

仏教では、お互いが幸せになるために、「布施」、「施し」というものを大切にしなさいと教えています。「布施」といってお金と誤解されますが、もちろんそれも大事ですが、財産や物でなくてもできる「無財の七施」というのがあります。物やお金を必要としないで、お互い

が幸せになる施しということになります。七つあるのですが、その一つに「和顔施」といって、穏やかな和やかなお顔で相手に接するというのがあります。

歌詞の中の、「幸せには ふさわしい 笑顔があるはず」とは、まさに「和顔施」のことではありませんか。幸せだから笑顔があるのではなく、笑顔があるところに幸せがあるのです。

毎日毎日、だれもが穏やかで、世界中のどこでも戦争やいさか이가なく、食べ物に困っている子どもが一人もなく、台風や地震の自然災害、富士山や桜島の噴火もなく、平和平穩に無事に暮らせるという、これは奇跡だと思えますが、そんな奇跡を望むのなら、心配したりうるたえたりばか



りいないで、笑顔を絶やさなければきっと幸せになれる、そんな和顔施にあふれた日々、笑顔からはじめたいものだと思ってあります。

■微笑みの国

ミャンマーのキャッチフレーズは、「微笑みの国」というのだそうです。えっ、と思いました。以前、タイに行ったときも「微笑みの国」と言っていました。まあ、どっちも仏教の国ですから、和顔施ということを実践して、「微笑みの国」なのでしょう。そんな国に出かけてくるのですから、きっとたくさん微笑みをいただいて、幸せになって帰ってこれるでしょうし、きっと仏さんのような優しい顔になって帰ってくると思います。

ミャンマー紀行は、八ページ以降をお読みいただければと存じます。

(花園会新年会のお話より)

東日本大震災復興祈念の梵鐘

圓福寺では、市原別院「耕雲寺」境内に、東日本大震災復興祈念の梵鐘を新調し、鐘楼（鐘つき堂）建立を発願いたしました。（詳細は、趣意書をご覧ください。）鐘楼建築に先立ち、1月に、梵鐘鑄込み式に行っていました。

北 陸 中 日 新 聞

2014年(平成26年)1月10日(金)

大震災忘れず鎮魂深く



東日本大震災の復興と風化させないという思いが込められた「復興の鐘」が9日、高岡市戸出栄町の鑄物メーカー老子製作所で鑄造された。（飯田克志）

復興の鐘 鑄込み

高岡

依頼したのは、千葉県市原市に併設した原市の耕雲寺と千葉市稲毛区の円福寺の住職を兼ねる宮田宗格さん（55）。宮田住職は岩手県奥州市出身。田植えがでなくなっただけで使われなくなり解体された福島県内の農家から譲り受けた江戸時代の鐘楼を譲り受け、復興祈念の鐘を鑄込みする。この日は、今年最初に鐘を鑄込む「初吹」として職人たちが作業した。読経後、宮田住職や信徒ら九人が見守る中、取鍋と呼ばれた容器から真つ赤に溶けた銅とスズの合金が鐘の鑄型に流し込まれた。

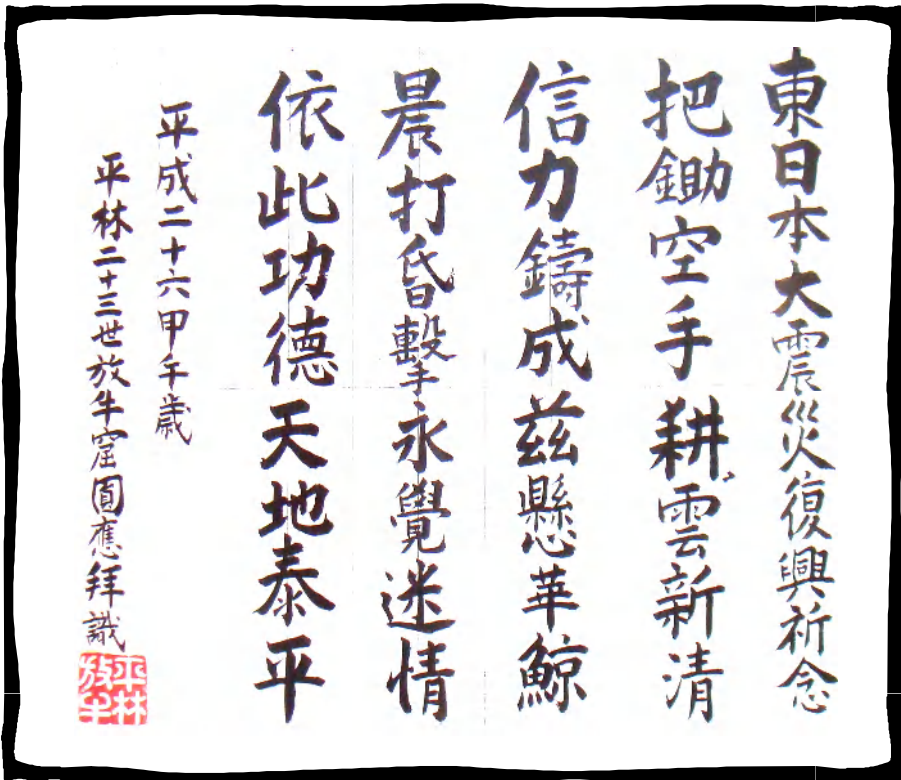


①「復興の鐘」の鑄型を前に、読経する宮田住職（右から3人目）ら
②溶けた金属を「復興の鐘」の鑄型に流し込む職人たち（いずれも高岡市戸出栄町で）

この日は、今年最初に鐘を鑄込む「初吹」として職人たちが作業した。読経後、宮田住職や信徒ら九人が見守る中、取鍋と呼ばれた容器から真つ赤に溶けた銅とスズの合金が鐘の鑄型に流し込まれた。宮田住職は「大震災を忘れないことが大きな復興支援になる。寺を訪れた人が鐘をついて被災地を思い、震災を風化させないことにつながってほしい」と話していた。

趣意書にも書きました通り、奇しくも被災を免れた鐘楼（鐘つき堂）を復元することが、東日本大震災の記憶を風化させないと同時に、復興を祈念し、震災で亡くなられた方々の鎮魂と

なることを願ってやみません。梵鐘鑄造にあたり、東日本大震災復興祈念の偈（漢詩）を、住職の修行の師であります、埼玉県新座市平林寺放牛窟糸原えんのうろうだいし 圓應老大師にお願ひいたしました。【左上】



東日本大震災復興祈念

空手にして鋤を把りくうしゆ すき と こううん

耕雲新たに清ししんりきいな

信力鑄成してしんりきいな

茲に華鯨を懸くこゝ ※かげい か あした ゆうぐ

晨に打ち昏に撃ちてめいじやう かく

永く迷情を覺すこ

此の功德に依りててんちたいへい

天地泰平ならん

平成二十六年甲午歲

平林二十三世放牛窟圓應拜識

※華鯨…梵鐘の別名

自ら手にする鋤や鎌と一つになってこつこつ耕すことで、新寺耕雲寺は清浄で清々しい。

このたび、信心の力によつて、新たに鑄造した梵鐘をここに懸ける。

その梵鐘を朝夕打つことによつて、たくさんの人々を迷いから目覚めさせるであらう。

この梵鐘があることの功德、たくさんの人々の信心、そのことにより世の中は泰平である。

復興祈念の偈を意識させていたいただきました。少し手前味噌な部分はお許しください。

この偈は、梵鐘の表に浮き上がるように鑄込まれ、梵鐘と共に永く伝えられることと思ひます。

なお、梵鐘鑄込み式には、住職、寺庭婦人、竜波禅士、役員さんほか九名で参加いたしました。新聞記事を右ページに掲載いたしました。また、これ以外にも、東京新聞、富山新聞、北日本新聞の各紙、また地元のテレビニュースでも報道されました。

住職就任二十周年記念 仏跡巡拜の旅
「微笑みの国」ミャンマーを訪ねて



パゴダを照らして沈む夕日。

2014/01/27~02/01

住職就任二十周年、などと大げさに銘打った、ミャンマーへの仏跡巡拜の旅に出かけさせていただきました。

今なお、お釈迦様在世のころの仏教が息づいている国、太平洋戦争で日本が多くの犠牲者を出した国、数多くの仏教遺跡が残る国・・・という事で、たくさんの期待と緊張を胸に抱いての旅でした。

聞くとは見るでは大違い、輪廻思想の曲解や戒律についての疑問、太平洋戦争の時と変わらぬ大地、大都会ヤンゴンなどなど、驚きと発見と少しの落胆とが入り混じった記憶に残る旅となりました。

参加してくださった方の感想文と、私の少しのコラムで、この旅をご紹介します。いただきます。



仏像も金ぴか。お顔もハデ。

「微笑みの国」

ミャンマー（ビルマ）を訪ねて

幕張 雨海 宏明さん

安井昌二主演の映画「ビルマの竖琴」又、中井貴一主演のリメイク版も心に残る佳作でした。仏塔、涅槃像、密林の残像は強烈でした。タイ、カンボジアと共に、上座部仏教の盛んな国ですから、機会があればと思っていました。しかし、最近まで軍事政権下、閉ざされた国のイメージが強いミャンマーです。



今回、圓福寺住職就任二十周年のミャンマー旅行のお誘いに躊躇なく参加申し込みました。一月二十七日から二月日まで五日泊六日、ヤンゴン、バガン、マングレー、バゴン各都市を巡りました。ヤンゴンへは約八時間のANAの直行便、各都市への

とにかく金ぴかのパゴダが多い。



お、車の八割はトヨタでした。街中に多くの濃紅色の衣の僧侶を見かけ、男性は一度、は僧籍に入るのが普通

移動は国内航空便（プロペラ機、自由席）でした。なにせ日本の一・八倍の国土面積ですから。ヤンゴン（旧称ラングーン）、第二の都市マンダレーは喧騒にあふれた活気のある街です。改革开放政策に転じ二～三年ですが、変化のスピードは地元の人も驚くほどのようです。最貧国と呼ばれる状況から脱するのも時間の問題でしょう。中国、欧米、日韓は人口、国土、資源に恵まれたこの国への進出に躍起です。市内で恐ろしかったのは道路の横断です。何しろ信号が殆どない中、車優先と聞き、皆で渡っても怖かった。な

で、尼僧、沙弥しやみも珍しくない。パゴダ（仏塔）には一般人が熱心に誦経し礼拝、祈願していました。歴代王朝（ビルマ族、モン族、シャン族など）の王族も、モ仏教に帰依し、仏塔財宝を寄進してきた。国民の九割が仏教徒だそうです。宗教分類すると仏



霧のように見えるのは、実は土ぼこりなのです。



早早起きは三文の・・・。ミャンマー旅行は、なにしろ朝が早い。ホテル発七時は当たり前、一番早いのは、五時。四国遍路で早いには慣れているとはいえ、早い。国内線の飛行機が早い便しかないの・・・とはいえないもの、バスや電車もあるはずと思う。
開放政策が進んだとはいえ、ミャンマーでは外国人が足を踏み入れる場所は厳しく制限されている。ということ、外国人観光客にバスや電車といった地上の交通機関で移動されて、見られては困ることもあると疑ってしまう。かつては、山中にケシ畑が広がっていたと本で読んだことがあるから、早起きさせられて、ついそんなことを想像してしまうのである。早起きは三問の始まり。



教徒が多いと言われる日本とは信仰心のレベルが違う。
 旅行中は毎日パゴダ巡りといってよい。参拝のマナーは結構厳しく、土足厳禁で敷地内は素足（ノーソックス）になります。また、スカート及び半ズボンの男女は用意されたロンジー（ミャンマーの民族衣装で巻スカート）を着用させられる。脛も露出してはいけないように、ここは仏教の聖域なのです。

この旅行で一番の見どころはやはり仏教三大遺跡のひとつ、バガン仏教建築群でした。バガン平原に点在する大小二千余の寺院、パゴダ。大半が西暦十一



目が大きくて、かわいらしい仏様

世紀から十三世紀に建造された。遺跡とは失礼な話で、今も民衆の信仰の対象として崇められ、決して遺物ではない。個別の寺院参拝もいいが、高所からの遠景が特に素晴らしい。シェンエサンドーパゴダに登り、点状するパゴダを一望した感動は忘れられない。（夕日鑑賞が目的でしたが、当日は雲が多く落日は見られず残念）
 テレビの世界紀行番組で印象的だったバガン最大のアーナンダ寺院も圧倒的な存在感でした。本堂内に九・五メートルの四体の仏像が四方を向く。仰ぎ見ると厳かな仏様に私は自然に



口紅まで塗った仏様

合掌し拝礼していた。
 ミャンマーの寺院、パゴダはひたすら大きさと派手さを誇っている。仏像は安置しているというより、建物と一体化しているように見える。ともかく金箔と原色塗料を多用し、陽が当たると眩しい。昔から金と寶石が多く産出される国らしい。千年前の仏像、パゴダも造立したばかりのようにキンピカです。さらに電飾を光背に使っている寺院は、失礼ながら日本でよく見かける国道沿いのパチンコ店のようです。レンガ、石材と木材など建築資材の違いもあるが、やはり上座部仏教と大乘仏教の違いもあるのでしょうか。私た



非課税のツケ

世界三大仏教遺跡といわれるバガンには、かつて四千ものパゴダと寺院が建立されたという。現在でも、大小二千ほど残っているが、それほど権勢を誇ったバガン王朝がほろんだ理由の一つに、税収の激減があるという。日本と同様に、パゴダや寺院を非課税としたため、そのあまりの多さに税収が減って国の財政が行き詰ったのだそうだ。

ち日本人は古さとか渋さとかに重きを置く感覚が強いのでしようか。寺院、仏像をほぼ古美術品として鑑賞する日本人と信仰対象と仰ぐミャンマー一人との違いでしようか。海外旅行はいつも我々自身を見直す機会になります。

九名と少人数のツアーとなりましたが、楽しく、思い出深い旅行となりました。企画された宮田住職はじめ同行の皆様に感謝いたします。

ミャンマー旅の思い出

穴川 久保忍い子さん

宮田住職就任二十周年の企画としてミャンマー旅行のお誘いを受け、こういう機会でもないとミャンマーには、行かれないと思い主人と同行を決め、近くの知人Nさんと三人で参加させていただきました。宮田ご夫妻と檀家の方たち四人を合わせ、総勢九人です。



緑が多いと感じられました。

成田から8時間程で、ヤンゴンに到着しました。途中富士山が、とても素晴らしい姿を見せていて、この旅行を歓迎しているようでした。現地のガイドさんは、女性の方でした。僧院で日本語を学

ばれたそうですが、とても上手でよくミャンマーのことに勉強している方でした。

ヤンゴン市内は、車が多くバスなど走っています。ドアは、開いたまま、ドアにぶら下がって乗っています。子供の頃の日本のようです。自動車は、右ハンドルの日本車がほとんどで、右側通行で走っています。見覚えのある車と思っただけ、京成バスが塗り変えずにそのまま走っていました。道を横切るのも信号がないので、なかなか難しいありさまです。

「微笑みの国」とガイドブックに記されていたので、尋ねると、国民は、皆やさしいよう



日本製の中古車であることに価値があるのです。

で、交通事故もあまりないし、トラブルもないそうです。戦時中日本に苦しめられたことがあっても「ミャンマー人は、忘れます」といつていたのが、印象に残ります。ミャンマーの人々は、とても心の広い国民性なのでしよう。

ミャンマー料理は、油が多く辛いといわれ、食べられないかと思ってしまうが加減して下さったのかそれ程でもなく、ご



ジャガイモ料理
前菜(お茶の漬物もある)

ミャンマーのワイン
もやしと厚揚げの炒め物

はんを大皿に取り分けてくれます。その周囲にお皿に盛られたおかずを少しずつ取って、ごはんを混ぜながらいただきますでしたが、とてもおいしかった。ミャンマーにいる間にイタリア料理、中華料理、フランス料理、日本料理(揚げだし豆腐、エビフライ、串カツ、酢のもの、野菜の煮もの、味噌汁など)とてもおいしかった。オーナーは、日本女性のようですが、不在でした。店員の女性は着物姿の人もいました。

ホテルの朝のバイキングは、おかゆ、めん、パン、その他たくさん料理が、並びました。いつも早く行きましたので、「もう五分待って。」と言われる時もありました。

ミャンマーでは、ロンジーという国民の民族衣装を奨励しているのです、男性も女性もはいています。巻き方が、男女で、異



市場のおばさんたちは、長身ですらり・・・でもない。

なるそうです。こちらの女性は、アウン・サン・スー・チーさんのように長身で、すらりとしてるので、ロンジーが、とても似合います。毎日寺院巡りをしましたが、お寺に入る時も膝が出ているとロンジーをはかされました。そして、こちらのお寺は裸足で入らなければなりません。これには、びっくりでした。お釈迦様を大事にする国だけあって神聖な場所ということでしょう。最初は靴下をその都度脱いで、裸足で歩きました。が、だんだん面倒になりYさん

金箔を貼り付けてお参りするため、原型をとどめていない金色の仏像。

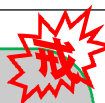


のようにホテルのスリッパを履いて行きそのまま入口で脱いで、入ることにした。寺院の中といっても建物の中だけではないので、鳥の糞あり小石あり、おまけに日差し(三十度)で熱くなっていて、歩くのも大変でした。仏像は、大変大きく立派で、皆、金箔が貼られ金ピカ。東西南北の四方向を向いた仏像が多かった。仏像もどんどん上に貼られていくので、益々大きくなっていくそうです。また近くから見上げた時と離れて見た時とでは、お顔が変わり、微笑まれるというものなど沢山拝見しました。中でも大きく立派

で、たくさんの人々が、お祈りをしているところの仏像は、残念ながら男性しかおそばに近づけない仏像もありました。真っ白な大理石で造られたお顔は、あまりに綺麗すぎて日本の仏像の持つ、落ち着いた色合いで目を閉じているお姿の方が、神々しく日本の良さを逆に実感した。涅槃像も想像以上に大きく、足の裏にも経典がびっしり書かれていた。パゴダ(仏塔)は、各地に非常に多く建てられています。その中にはお釈迦様の髪の毛などが、入っている。中は空洞ではなく石やレンガで積み重ねられている。パゴダはまた、大変大きく金箔で、ヤンゴンの有名な



余りの大きさに写真に納まらないシュエダゴンパゴダ。その輝きのあまり逆光になってしまします。



托鉢と寄付

僧院の食べ物は、托鉢と寄付によっている。その托鉢風景も、観光客の格好の被写体である。朝暗いうちに起きて、僧侶のためにご飯を炊くのは家庭の主婦の日常だと聞いた。一方、だれでも食べ物寄付することができ、有名な僧院への寄付は順番待ちなのだそう。ということ、有名な僧院は托鉢をしなくても食べるものに事欠かないのである。国を超えて、裕福な寺は墮落するのかもしれない。自戒、自戒！



マンダレーの王宮

シュエダゴンパゴダは、一番上にダイヤモンド（七十三カラット）が飾られ、その土台の周囲には八つの小さい曜日（の仏像があり、たぐさんの人がお参りしていた。私たちは、それぞれに調べていただいた生まれ日の曜日のところで、水をひしゃくで、9回かけて、お祈りをした。ミャンマーの人の名前は、最初に曜日をつける。その次に好きな文字を入れる。ガイドさんはキンさんといったので、

皆、金曜日生まれかと思ったら木曜日生まれでした。名前の由来は、ここからきているのかな？ マンダレーで

は、最後の王宮のあったところであり、一辺2キロの四角形の敷地の周囲が濠に囲まれ、中に段々に重なった塔が、濠に移りとても美しかった。王様の玉座など見てまわったが建物は、繊細な素晴らしい豪華な彫刻が、施こされていた。一族の邸宅が立ち並び、きれいな赤い花が咲いていた。マンダレーのガイドさんは、八十過ぎのおじいさんから日本語を習ったそうで、日本語は、上手だが、現地の話よりもシヤレばかりいっていた。“今朝袈裟を洗った。高速料金を自分で動いて払うに行くので、”自動です“といった具合。シュナンド僧院では、修行僧



食事前に整列する僧侶たち



一粒たりとも・・・。ミャンマーで有名な僧院の一つ、マハーガンダヨン寺院には、千人もの修行僧がいるという。仏教の戒律を厳しく守りながら修行をしている。

その修行寺院の食事風景が観光客に人気があるという。確かに、千人もの修行僧が一齐に食事をとる風景は圧巻であろう。外国人観光客がカメラを手に群がっている。日本の修行道場では到底考えられない。なぜなら、いのちをいただく食事は神聖な行であり、食事の場所も「三黙堂」に数えられ、神聖な場とされているからである。

食器を洗った水が流れる側溝を見ると、ご飯粒や残った野菜などが流れに引っかかっている。愕然とした。一粒のご飯粒でも側溝にあるのが見つかったら、先輩にこっぴどく叱られたものである。一粒の米といえども、いのちを大切に作る、ひいては殺生をしないという戒律を守ることにつながるからである。野菜くずももちろん、その野菜くずを煮て作ったのが、建長汁のはじまりでもあるから・・・。ミャンマーの戒律はどこに？



乞食(こつじき)問答

僧院の食堂(じきどう)の、食器を下げる場所に、洗面器を手にした薄汚い身なりの人がしゃがんでいた。何をしている人か、ガイドさんに聞くと、僧侶の食べ残しをもらいに来ているのだという。

修行時代、いただいたものは残さず食べると言われた。施しを粗末にしては、施した人にも、その食べ物にも失礼ある。そして、自らは、不殺生戒を犯すことになるからだ。

ところが、ミャンマーの僧院では、托鉢でいただいた食べ物を食べ残すらしい。そして、それを食べるものに困った人がいただいでいく。

修行道場に乞食に来る人もいなかったから疑問にも思わなかったが、もし食べるものに困った人が来たらどうしたのだろうか。

自らの修行としていただいたものを食べるのか、困った人に食べ物分け与えるのか。前者は自らの修行第一とする上座部仏教のようでもあるし、後者は多くの人を救おうとする大乘仏教のようでもある。日本は大乗仏教、ミャンマーは上座部仏教なのだが・・・。
なにやら、乞食の禅問答の公案をもらった気分である。

のお食事の時間を見学できた。僧が2列に並び托鉢の入れ物と布を袈裟の上に掛け時間になるとご飯とおかずを入れてもらって、テーブルの前に座り無言で食事をし、残さずに食べるこのことでした。食事は、一日に二回、十二時までに来ないと食べられない。

僧院には、寄付された食料が山積みになされていた。僧院の中には、残り物をいただく人(気の毒な人)も、数人待っていました。ここで、トイレに行くとき便器の脇に水の入った細長い水槽があり、ひしゃくが入っていた。多分これで、



花売りの女の子。頬には「タナカ」という化粧をしています。

流すらしい。それだけ...?。バスの中から托鉢中の僧侶をたくさん見かけました。ピンクの袈裟を付けた尼さんも見ました。ミャンマーの人は、功德のためにお坊さんに差し上げる習慣になっている。人々は、朝早くからお坊さんが、托鉢に訪れるのを待ち、準備をする。お釈迦様は、何でもいただきます、雑草でもいただきました。差し上げた人が、功德を得られるというので、いただいたという。悟りを開いた人にしかできないこと、とても凡人には、真似のできないことだと感心した。



目がパッチリあいているので、涅槃像ではなく、「寝釈迦像」だそうです。

最後の日、日本人墓地を訪れると、丁度その時に二年に一度行われている慰霊祭が、日本からの遺族と厚生労働省の方たちで、行われていた。そこにあった碑を読んでいくうちにミャンマーの人の温かい気持ちに涙が込み上げてきた。そこには、日本軍が、追い詰められビルマに



経典を刻んだ大理石が整然と並んでいたマンダレーのお寺。

進軍した時、ビルマの人々が援助してくれたこと、敗戦後も変わらぬ仏心で、接してくれたことへの感謝の気持ち、刻まれている。他にも“散る桜残る桜も散る桜”の碑もあった。今でも、日本兵が、この辺に埋められているという情報をもらい、確認をすることもあった。十九万のうち十三万の遺骨がわかったきり。ビルマの豎琴の水島上等兵のように遺骨を収拾するということも想像できるように思われます。その後遺族の方の詩吟が、聞こえてきました。続いて“ふるさと”の合唱が響いてきました。私は、この歌には、以前から弱いのです



パゴダを護る動物ですが、ちよっと滑稽



偽善祭？

ヤンゴンの日本人墓地に着いて、慰霊塔への参道を進んでいくと、大きなテントが張られ、花輪が飾られている。献花の最中で、慰霊祭をしているらしい。慰霊塔の前でのお参りはしばらく遠慮して、周りの墓地や慰霊碑を巡ってみた。戦争前に亡くなった人のお墓や、小さな子どものお墓など、第二次世界大戦以外のものも数多くあった。

そろそろ慰霊祭も終わるだろうかと、慰霊塔の前に戻った。花輪には、ビルマに出兵した都道府県のものや厚生労働省のものもある。すでに慰霊祭も終わり、慰霊塔の前で写真を撮ったり、出身県の花輪の前で写真を撮ったり、さながら撮影会である。その間、私たちはテント後方で待つことになった。誰一人として、二年に一度の慰霊祭の時に参りに来られたのだから、どうぞお参りなさってくださいとは声もかけてくれない。自分たちの行為だけが尊いとも思っているのか。ほかの人への思いやりもない。これでは、慰霊祭ではなく、偽善祭ではないか。慰霊塔に手を合わせて、日本人墓地を後にした。



大河イラワジ

二泊目の宿は、エイヤーリバービューホテル。エーヤワディー川、旧称イラワジ川、河畔にある。

名前の通り、ホテルの庭から、イラワジ川を眼下に眺めることができる。岸边には、幾艘もの木造の舟がつながれていて、川岸には柱とテントだけの飲食店があり、ちょっとした港のようである。

ホテルの部屋で、暑い日中の疲れを取って、再び庭を歩いてイラワジ川を眺めに行くと、眼を疑った。木造船しかないと思っていた川岸に、巨大な客船が停泊している。それも二隻もである。よくぞあんな近くまで船を寄せたものだと思っほどの近さである。

考えてみれば、イラワジ川は大河である。巨大客船が航行するのも不思議ではない。そんな船を見てから、太平洋戦争のことを思った。この上流を、インパール作戦に失敗した日本兵が敗走しながら渡ったに違いない。食料もなく、疲弊しきった体でよくぞこの大河を渡ったものだと思うと、胸が締め付けられる。意気地のない自分なら、途中で川に流されたと思ひ、背筋がぞっとした。

が、この歌を聴き、益々目頭が熱くなりました。どんなにか日本に帰りたかったことか。この歌が、この墓地の人たちを慰めていることでしょうか。その後白い像（ミャンマーの宝物）や、有名なパゴダを見、アウン・サン（建国の父）のお屋敷跡でヤンゴン最後の夕食ミャンマー料理をいただきました、ヤンゴン空港に向かいました。最後にサライ（今回の旅行会社）の現地の方がミャンマーの現状について二〇一〇年に民主化されたが、女性の教育、インフラ整備、などなど問題が山積みで、先進国の力をかりて、時間をかけずに、無駄なく、失敗せずに、近代化



金びかも高じて、ネオンや電飾も施された仏様



ミャンマーの馬車。人力車を馬が引いているような感じです。

を進めていきたいという話に、こんな頑張っている人たちがいることに感心した。日本の新聞にもミャンマーのことが、よく報道されている。資源豊富な国、発展間違いなしの国である。二〇一四年に私たちが訪れた時とは、一段と異なる近代化されたミャンマーに生まれ変わるのだらう。

メンバーに恵まれ、大変楽しい旅行をさせていただきました。皆様ありがとうございました。うございまして。



穴川風土記



寺から半里

「わが町かど探索」

園生町 熊倉 浩

連

その2

犢橋の宿場町・北清掃工場

大分時間を喰ってしまった。両側に農家が並び古い景観が残っている道を行けば御成街道に出る。いつの間にか拡幅され横断歩道を渡るのに長く待たされるほど往来がはげしい。

犢橋の宿場町はかつての姿を留めないが面白いことに辻には昔ながらの三猿の庚申塔が立っていた。年号は読めないが江戸後期二百年は経っているだろう。昭和五十八年の新しい塔と並んでいたがこれには三猿と道祖神の文字だけが、そして上部には日輪と



犢橋の辻にたつ三猿の庚申塔

月輪が刻まれていた。

駒形 観音堂

はすぐ右の長沼交差点の先だが後日にまわすことにして街道を横切り直進する。昔ながらのこの道もいい。やがて北千葉ICが見えた。

Cが見えた。ガードを潜ると北清掃工場となる。市内のかなりの場所から見える白亜の煙突からは煙や有害ガスは出ていない。高度な除塵技術によってかつての公害問題は救われた。焼却の熱を利用して隣接する花見川いきいきプラザや温泉プールが市民に開放され、入湯料一〇〇円で温泉も利用できる。



千葉山にたつ星神宮

清掃工場下のえぐられたような底部は広い公園でお花見広場となっている。中にゴルフやテニスコースの施設があるが、実はいざ洪水という時の貯留池なのである。大雨には2m余の水嵩となる。「子と清水調整多目的施設」なる標識と公園使用の案内があった。清掃工場ができたころは、ここは親水公園であって水生植物や花々が散策しながら鑑賞できた。

子と清水の地名と伝説は各地にあるが千葉にもあると知ってから大分経つ。今は地図にも載らない子と清水（小字名？）とはここだったのか。時代とともに歴史的地名が消えていくのは淋しい。これを以て進歩というべきか、はたまた後退というべきか。

黄門様・水戸光圀は延宝二（甲寅）年四十六歳の時房総を旅行している。大日本史の取材を兼ねて父頼房の養母お梶の方の墓所（鎌倉英勝寺）に詣でるためであった。下総神崎から安房勝山まで房総を縦断しそこから水路鎌倉へ渡っている。

その旅行記『甲寅紀行』に、「辰ノ刻、酒々井ヲ出、（略）六方ノ原ト云、渺茫タル原野ヲ過キ、（略）原ノ内ノクホミニ少シノ水アリ、ソレヲ

積橋村の小学校だった長福寺



積橋の集落から長福寺・三社神社へ
 ここから西へ谷を下り御成街道へ出、消防署前の信号を右へいく。次の信号を左に入れば街道筋から離れた積橋の集落である。南面する傾斜地に昔ながらの家々が密集している。地図は役に立たず迷路のような細い路を彷徨さまよってしまった。それでも宮野木や

親ハ古酒、子ハ清水ト云テニツアリトソ、遂ニ千葉ノ町ニ到ル…」とある。二つある「子と清水」の一つがここだとわかった。甲寅紀行によって千葉の北の方と見当はついてはいたがここだとは発見であった。

さつきヶ丘への抜け道として車の往来が激しい。やや急な坂を降ると村はずれの長福寺（真言宗豊山派）前に来た。過去二回火災に遭い寺の記録は

存在せず何時の創建か不明というが過去帳や墓石から桃山時代すでに存在していたことは分かっているようだ。現在の本堂は長い間無住であって明治初期から積橋村小学校の校舎として昭和二年まで六十年にわたって使用されていた。村民一体の教育の中心であったと伝えられている。土地柄であろう出羽三山参り、四国巡礼、秩父巡礼等々の記念碑が境内一杯に建っていた。そして千葉のお大師巡礼「十善講」の二十番札所でもある。この大師堂には同じ村内の十九番神明寺と二十一番勢至堂の二ヶ寺が併存されている。お堂に掲げてあるご詠歌も三ヶ所分が並んでいた。この二ヶ寺は廃寺になってしまったのだろうか。境内には中央部が明らかに補修したとみられる巨大な宝篋印塔があった。北総には江戸時代の大型の宝篋印塔が各地に現存する。栄町龍角寺、成田市



三ヶ寺並んだご詠歌の額



上福田共同墓地、滑川観音（県文化財）、酒々井町経胤寺などには数基～十数基の大型宝篋印塔は知るところである。
 ここ長福寺は一基だがそれらに劣らない大きさであった。また苔むした古い墓石や石碑が鐘楼前の墓地に集められ、近年の新しい墓苑と対照的に並んでいた。
 周知のとおり北総地区は子安観音信仰の盛んな土地柄である（「駒形大仏」の項で後述）。本堂と向き合っていた子安観音が三体祠におさまっていた。各地で子安観音を見てきたがこの三体にはびっくり。左に蓮華を持った観音様が右に幼子を抱えながら乳を飲ませているではないか。祠の前には二体の如意輪観音像があった。
 谷を越えた先に見える森が三社神社である。珍しい名前にひかれてやって

霊場巡拝記念碑



きたのは何年前だったか。周囲はすっかり変わってしまったが神社と森はそのままだった。
急な階段を登ると真新しい一の鳥居である。今回の東日本震災で崩壊したので新しく建て替えた旨の説明があった。元の鳥居は古い時代のものだったようだ。
参道の右側には伊勢講や富士講の、更に出羽三山や秩父観音巡り、四国八十八霊場の記念碑までが整然と並んでいた。余りの多さなので数えると出羽三山関係二十五基、秩父関係二十一基、伊勢講関係二十八基その他であった。頭が入らないほどの間隔なので碑面が読めないのは惜しい。社務所のドアを叩いたが留守で聞けなかったが多

くは方々から此処に集められたものではないなからう。神社創建の年代は不明だという。もともとは産土神あめのこやねのみこと（天児屋根命）を祀った社であったが、伊勢神宮と鎌倉八幡宮を勧請して三社とした。古来村の男子十五歳になると伊勢参りの帰りに鎌倉八幡に詣で、帰村して初めて男として迎え入れられるのがしきたりであったと。由緒には『国乱二因リテ道中艱難ヲ極メ参詣ノ自由ヲ得ズ 依ッテ両宮ヨリ分霊ヲ・・』とある。
当初三社大明神と称したが神仏分離により三社神社となった。個人的な推測だがそう古い創建ではなからう。勝手を言わせてもらえば江戸期の過酷な幕政による農村の疲弊のため遠路参詣に行けなかったのではなからうか。
社殿は近年建て替えられ比較的新しく、屋根には九曜紋と月星紋（千葉氏の家紋）があり千葉氏の庇護の下にあったことがわかる。正月には奉射祭が行われるという。ここにも幼子に乳を飲ませている子安観音があった。長福寺と全く同じスタイルであり祠におさまっていた。
神社前の辻に馬頭観音があった。勿論道標を兼ねている。正面こてはし・うなや（現宇那谷町）方面、左みやのき・ちは方面と読めた。馬頭観音像の下部には奥の院馬頭観世音で



九曜紋と月星紋

みた石の絵馬そっくりのレリーフが彫られてあった。これは珍しい。
この先少し行けばさつきが丘団地で、犢橋貝塚（国指定史跡）が今は覆土され芝生の下に眠っている。千葉市内五つある国指定貝塚の一つである。（全国で千葉だけ。前回「寺から半里」参照）
長沼原神社を訪ねる
花見川いきいきプラザから別のガードをくぐりもと来た道に戻る。東関東高速と十六号が交差する点から高速道に沿って東三〇〇m行くと長沼原神社がある。もと長沼原開拓神社と称したが社名が変わったようだ。主神天照大神・菅原道真・二宮尊徳の三神を祀る。創建時はやや離れたところで東面であったのを覚えているが高速道工事のため遷宮したとあり南面で社前は綺麗な芝生の広場であった。
小ぶりで可愛い社殿だが精巧に造ら



馬頭観音の彫り物

長沼原神社（旧長沼原開拓神社）



た様式でほっとした。多くの神社に見られるこの様式の乱れは明治の国家神道以来、特に戦後建てられた社殿に多いのは確かかなようである。覆屋の下とはいえ防犯のため金網で嚴重に囲まれた社殿は悲しげであった。

長沼原の開拓団が農業協同組合を立ち上げると同時に入植者一同氏子となりこの社を建てたという。境内には長沼原開拓碑が立っていた。くだいようだがコラムを参照されたい。

芝生で暫しの休憩をとる。入植開墾に精をだした人々の苦勞が偲ばれたひと時であった。

（次号につづく。）

れ左右の切妻には丁寧なままでにむなもちばしら棟持柱が付き、遷宮の時に造られたらしい大きな覆屋おおいやに納まっている。社殿かつおぎのちぎ鰹木ちぎや千木も主神にマッチし

長沼原開拓碑

昭和二十年八月十五日大東亜戦争の集結により復員軍人外地引揚者戦災者等が国策として行なわれた開拓事業に加わり帰農組合を結成し混乱せる社会の安定と国民の食糧増産を祈念し速かなる祖国再建を図る為下志津原元陸軍演習地に入植し荒野に開墾の鍬を下す昭和二十三年曙 千高池の辺 千葉農場の各帰農組合が合併し続いて同愛組合もこれに加わり長沼原開拓農業協同組合を組織し爾来本組合を中心に一致団結組合員の祖国愛と不撓不屈の精神と倦まざる努力により二百餘町歩の荒野を開拓し更に農業近代化諸施設を整え開拓事業完成の成果を修めるに至ったとき たまたま時勢の推移に伴い開発地域の変貌あるを思い入植二十周年を記念しその業績を永く後世にとどむる為組合員の氏名を刻し茲に開拓記念碑を建立する

昭和四十年九月十五日

篆額 千葉県知事

友納武人

撰文 長沼原開拓農業協同組合 組合員一同

長沼原開拓碑



(2月の「園だより」から)
子ども百態

毎年、「冬たんけん」では、子どもたちに大迫力の雑木の伐採を見せていました。今年は羽沢さん（お弁当のお茶を用意してくれるおじさん）からいただいた、たくさん薪の材料があったので、伐採はお休みしました。バリバリ、ドッソーンの大迫力と、私のチェーンソーの腕前をお見せできなくて、残念でした。それでも、子どもたちは力ヤの棒を持って行進したり、冬枯れした田んぼのわきを歩いたり、急な土手を登ったり、きのこを発見したり、葉っぱが落ちて明るい雑木林をガサゴソ落ち葉を踏んで歩いたり、冬ならではのたんけんをしました。



伐採シーンを見られなかった今年の「冬たんけん」の目玉は、なんととっても年長さんの忍者屋敷だったようです。



やさしい年長さんが、年中・年少さんにも忍者屋敷で遊んでいいよと言ってくれたようで、どの学年も忍者屋敷に大興奮でした。

とはいっても、まだ入り口の周りではできていなくて、高い入口をどうやって入るのだろうかとなりました。年長さんに、「土足で入らないでね。」と言われていたので、小さい子どもたちも靴を脱いで忍者屋敷に入ろうとします。土台のブロックに足をかけて登ろうとするのですが、手をつかむところがありません。足をかけたはいいけど、登りつけずに下りてしまうことの繰り返し。少し低い一棟目なら・・・と思いい、入り口を開けると我先に殺到し、こちらは楽々入ることができました。すると、一棟目と二棟目の間で大泣きしている子がいます。さては、どろどろにした靴下を脱いだから、足が冷たくて泣いているんだなと思ったら、入り口が高い二棟目に入るこ

とができなくて、悔しくて泣いているのでした。

ところで、四苦八苦してようやく高い入口をクリアして入った子は、どうしているかというと、忍者屋敷に入ったはいいけど、何をしたいのかわからずいます。

入れなくて悔し泣きする子と、入ったはいいけどどうしていいかわからずキョトンとする子。この対称的な姿が、いろんなことを考えさせてくれました。

結果が大事なのか、過程が大事なのか？

与えられた方がいいのか、自ら獲得した方がいいのか？

ハードルをさげるのか、上げるのか？

手を出すのか、出さないのか？

子どもの姿を見てみると、考えさせられますよね。



そうそう、気になっていた悔し泣きの子はどうしたかというと、二棟目によやく、なんとか入ることができ、大満足だったようです。

平成二十六年上四半期
お寺と和尚の日録抄

1月		2月	
1日	新春ご祈祷	15日	土曜会「仏教シアター」
1日～3日	修正会	17日	幼稚園、年長組市原たんけん隊
9日	市原別院「耕雲寺」梵鐘鑄込み式	18日	スマートフォンコミュニティ、「写経会」
10日	幼稚園、年少組市原たんけん隊	19日	幼稚園、年長組市原たんけん隊
15日	東京教区第七部部内会	21日～23日	四国あるき遍路の旅(二巡目第13回)
17日	幼稚園、年中組市原たんけん隊	25日	スマートフォンコミュニティ、「写経会」
18日	幼稚園、市原ボランティア「Q園隊」	3月	幼稚園、市原ボランティア「Q園隊」
19日	花園会新年会	1日	写経会
20日	幼稚園、年長組市原たんけん隊	2日	幼稚園、市原ボランティア「Q園隊」
25日	幼稚園バザー「くすのきまつり」	12日	幼稚園、年長組市原たんけん隊
27日～1日	住職二十周年仏跡巡拝ミヤンマーの旅	13日	スマートフォンコミュニティ、「写経会」
3日	写経会	15日	幼稚園、卒園式
4日	スマートフォンコミュニティ、「写経会」	16日	春彼岸法要
5日	幼稚園、会計監査	23日	土曜会「彼岸法話会」
6日	幼稚園、涅槃会	24日	布教師 林 学道師
7日	東京養源寺、先住職齋会	25日	取手長禅寺、春彼岸法要
11日	足利光得寺、寺院婦人葬儀	27日	東京教区第七部部内会
		28日～30日	スマートフォンコミュニティ、「写経会」
			冬の寺子屋、於水上・苗場



ミヤンマーのお坊さん

□□境内墓地のご案内

境内の墓地に空きができましたので、ご希望される方がいらっしゃいましたらお申し込みください。

- ◇募集期間・・・先着順
- ◇募集区画・・・一区画
- ◇区画面積・・・

奥行 85 cm × 幅 90 cm

- ◇永代使用料・・・百万円
- ◇応募資格・・・

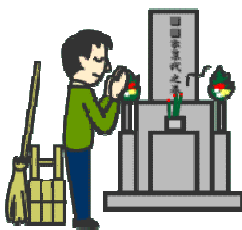
圓福寺の檀徒となること。

(過去の宗旨・宗派は問いません。)

- ◇建墓条件・・・

丘カロート式です。
墓石については特に
条件はありません。

いつでもご自由にご見学ください。また、ご不明な点はお寺までお問い合わせください。



寺の事件簿

豪雪に見舞われる！

去る二月八日からの雪は、翌九日朝には、圓福寺をすっぽりとおおってしまいました。風があつたために、玄関前は吹き溜まりとなり、深さ四十cmほどの積雪になりました。

学生時代新潟に住んでいたので、多少の雪では驚きませんでしたし、雪かきも慣れたものですが、角スコップで雪のブロックを作りながらの雪かきは、圓福寺に入寺してから初めてのことでした。

本堂の瓦が落ちたり、くすの木や赤松の太い枝が折れたりして、その後の後片付けも大変でした。

被害に遭われた方には、心よりお見舞い申し上げます。



吹き溜まりの雪の深さは「一覽の通り」。



客間縁側から見た池
玄関奥の中庭（石燈籠の笠がすこい。）
手水鉢の横から池への石畳
墓地の様子（涅槃像も布団をかぶったような姿）

